

# 南島文化研究所報

沖縄国際大学南島文化研究所  
〒901-2701 宜野湾市宜野湾二丁目6番1号

所長 田名真之  
電話 098-893-7967



## 追悼 窪 徳忠 先生

窪徳忠先生先生が2010年10月2日に亡く  
なられてから2年余が過ぎ、昨年の10月は三  
回忌でした。

1960年代に来沖されて以来、本研究所の特  
別研究員として、南島研の事業に貢献されま  
した。

今号は、ゆかりの方に窪先生との思い出を  
ご寄稿頂きました。

## 窪先生について、あれこれ

田名真之（南島文化研究所所長）

窪先生に初めてお目にかかったのは30年ほど  
前である。当時私は、那覇市の市史編集室（現  
那覇市歴史博物館）に勤めていたが、嘱託をし  
ていた同僚の玉木順彦氏を訪ねて来られたので  
ある。先生はその頃、ご専門の道教の研究で、  
沖縄を重要な調査地とされていて、毎年ほども  
来島されていた。度々私の職場にもお出でにな  
り、そのうち、あの大きな声で私にも声がかか  
るようになった。久米村の家譜のことなどいろ  
いろ質問され、可能な限りお答えしたが、勉強  
不足を痛感させられたことも、度々であった。

新宿のお宅にお邪魔したのは、20数年前。渡  
名喜明氏の案内で、沖縄県地域史協議会の東京

調査団十数名が押しかけ、秘蔵のお酒まで出し  
ていただいて遅くまで大騒ぎをした。

2005年には神奈川県大和市の中央林間のマ  
ンションにお邪魔した。私が沖国大に職を得た  
時でもあったので、その報告がてらの訪問で  
あった。詳しい道順を電話でお聞きしていたの  
で、そのつもりで歩いていると、途中の十字路  
で先生が待っておられて、恐縮至極した。その  
頃奥様は足を悪くされていて、外出はままたら  
ないとのことで、先生がスーパーに買い物に  
行ったりしていると自慢(?)されていた。

2008年に奥様を亡くされてからの先生は随  
分気を落とされた様子であったが、一人暮らし

は心配ということもあって、2009年には施設に入られた。南島研の上原所長や崎浜さん、すでに神奈川大学に移籍されていた小熊さんと私の4人がお見舞いに伺ったとき、先生は随分お痩せになっていて、一瞬我が目を疑ったほどである。それでも話していくといつもと変わらない先生がそこにはいた。もう一度沖縄に行きたい、「カジマヤー」も沖縄でやりましょう云々、軽口も出て先生も楽しそうであったが、いよいよお暇する段には、4人一緒じゃなくて、一人一人別々にきてくれたら…としみじみおっしゃられた。ぐっとくるものがあった。また寄りますから、とはいったものの、それが先生との今生の別れとなった。

私は「窪徳忠研究奨励賞」の第4回の受賞者である。同賞は先生が南島研に寄付された基金を原資としているが、まだ那覇市で勤務していた頃、先生がいらして、「今度冲国大の南島研で、『研究奨励賞』を創設する。琉球と中国の文化、歴史を研究する若い研究者に贈る賞だ。」と話された。実に良いことですねとお答えしたら、「田名君は対象外だよ、これからの若い人のための賞だから…」と念押しされた。それなのに、その数年後に賞をいただくことになった。

「対象外だったはずですが」と少しばかり拗ねてもみたが、先生の名前を冠した賞をいただくことは名誉なこと、望外の幸せであった。



那覇市史編集室にて (2002年)

先生は実に筆まめであった。年賀はもとより季節のたよりなど、度々お葉書をいただいた。ある時、「世界遺産のカンボジアのアンコールワットに行ってきました」と、自慢げに書き送ったら、先生から、私はあそこにもここにも行ったぞと、逆に自慢され、恐れ入ったこともある。

先生が逝かれてから早いものでもう3年である。今もってなかなか実感が湧かないが、先生の沖縄への思いは、南島研や「窪賞」のみならず、関係した多くの人々にしっかりと受け止められているはずである。改めて感謝の意を表する次第である。

## 窪徳忠先生と沖縄研究

渡名喜 明 (元南島研特別研究員)

「道教」研究の碩学として知られた東京大学名誉教授・窪徳忠先生が亡くなられたのは、2010年10月2日。97歳で天寿を全うされたが、先立たれた奥様と再会されてからすでに2年余が過ぎたことになる。

先生に初めてお目にかかったのは、私が東大文学部宗教学・宗教史学専攻に籍をおいていた頃で、紹介してくださったのは、主任教授の堀一郎先生であった。時に1969年、「東大紛争」の余韻が残る時期である。その後断続はあったものの、奥様ともども40余年のご厚誼をいただいた関係上、先生の訃報に接した時は万感胸に迫るものがあった。葬儀には、当時の南島文化研究所の上原静氏、専任所員の崎浜靖氏とともに参列させていただいた。この原稿は、参列に先立ってしたため、ご霊前に奉獻した文章に若干の加筆・修正を施したものである。

ところで、本誌を借りて先生のご業績の一端を紹介しようというのは、私が大学卒業後の

1973年に沖縄県立博物館の工芸担当学芸員として職を得て以降、「宗教研究」から離れて今日に至っている立場からすれば、荷が重い話であり、不遜とすら言えよう。とはいえ、先生の沖縄調査で運転担当をはじめとする「お手伝い」をさせてもらい、その間に先生からお聞きし、垣間見た調査研究の方法や内容、いただいた論文やご高著の記述、そして知り得た先生のお人柄まで、思い起こせば私にも何か書けることがあるかも知れない。それが執筆の動機である。

先生のご研究の柱と業績はいくつもあろうが、その中でまちがいに重要なテーマの一つが、「中国文化からみた」「沖縄の民間信仰」である。この一文をしたための主因であるが、まずは、私が理解できる範囲での先生のご研究の概要について触れさせてもらいたい。

さて、「道教」と言えば、すぐに老子や荘子の「老荘思想」を連想される方が多いと思う。しかし、台湾を含む中国文化圏においては、道教の「神々」を祀る多数の「廟」があり、参詣者が絶えない。いいかえれば、道教とは中国においてはまず「宗教」なのであり、先生のお説によれば、「儒教については、宗教とみる説と、そうでないとする説との両説があるので、これを別にすれば」「中国人のあいだからおこった唯一の宗教」（『中国宗教における受容・変容・行容』、1979年、山川出版社。以下引用はすべて同書）なのである。

先生が着目されたのは民間で信仰される道教の内容、その歴史や実態である。調査・研究の範囲は、中国から日本、琉球・沖縄、台湾、東南アジアまで多岐にわたる。先生のご研究の方法は、一貫している。漢文史・資料と研究史の渉獵、徹底したフィールドワークに基づく「実証的な調査」、および「比較研究」がそれである。

略歴をひも解くと、先生が東京帝国大学（現東大）文学部東洋史学科をご卒業なされたのは



南島研にて（2005年）

1937年。その後、兵役召集、東方文化学院研究員、東京大学東洋文化研究所研究員を経て、1949年に東洋文化研究所助教授に着任された。この当時の研究上の主要なご関心は「中国宗教」、特に道教の日本における「伝来」であり、まず注目したのが「道教的に言えば三尸（さんし）説、日本流に言えば庚申信仰であった」。ともに「長生」を念じる人々の間で流布する民間信仰だが、先生は日本のそれを中国からの「受容と変容」で解釈されたのである。とはいえ、お説を詳しく説明をする紙数の余裕も能力もない。この分野の調査研究成果については、第一書房刊『窪徳忠著作集』（全9巻）中の『新訂庚申信仰の研究』（上・下・年譜編・島嶼編の4巻）に譲ることにしよう。

若干追記するならば、先生のご研究の根底にあったのは、まずは庚申信仰を「日本固有」としたうえで、そのような「固有」の「民俗」に調査研究を限定する柳田國男の民俗学に対する批判であった。そして、柳田・折口信夫の流れを汲んで、日本の「古俗」や文化の「源流」を沖縄に求めようとする余り、中国や東南アジアなど周辺地域との「比較研究」がおろそかになりがちな従来の「沖縄学」の潮流に対する懸念があった。

「源流」や「伝来」、あるいは「ルート」の研究の前提になるのは、文献とフィールドの両分

野からする「分布」の広範かつ精密な調査である。日本における庚申信仰の分布を精力的に調査される一方で、伝来の経路として先生がまず想定したのは朝鮮半島経由、続いて沖縄経由。前者については「道教の信仰や三尸説が、土着の信仰や習俗とふかく習合しながら、人々に受け容れられていることがわかった」。

初めての「南西諸島」調査は、沖縄がまだ米軍の直接統治下にあった1966年7月のことであった。先生の「身元引受人」は、琉球大学の学長も務められた動物学の高良鉄夫教授であったと聞いている。その後の度重なる調査の「中間報告」が大著『沖縄の習俗と信仰』（1971年、東大出版会）であり、その「増補新訂」版を私たちは、上記著作集第4巻（1997年）として入手できる。沖縄調査で先生は、「三尸説や庚申信仰の片鱗すらみいだすことができなかったけれども、道教関係の信仰は、朝鮮半島の場合と同様に、土着の信仰と密接に習合し」「信仰や習俗として人々に受容されていた」ことを知る。

先生の沖縄研究の成果を、一般にも手取りやすく、わかりやすい文章で書かれたのが『中国文化と南島』（1981年、第一書房）、『沖縄の民間信仰—中国文化からみた』（1989年、ひるぎ社）、『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』（1990年、沖縄出版）である。

これらの本から私たちは、身近にあるシーサーや石敢当、台所で見られるヒ（火）ヌカン（神）、ウチカビ（打紙）と呼ばれる紙銭、ウサンミと呼ばれるお供え物、あるいは木造屋根の棟木に書かれた「紫微鑿駕」、屋敷門の突き当たりを設置されたヒンプン、トゥーティークン（「土帝君」と呼ばれる土地神、さらにはお墓の左（向かって右）に在するフィジャイと呼ばれる神、などが中国の民間信仰に由来するとともに一部はアジア各地に伝わり、しばしば「変容」を遂げながらそれぞれの地で「受容」され

たことを知らされる。

外来の宗教、広く外来の「文化」が、当該地域に「伝播」し、受容されるにあたっては、受け入れる側の取捨選択が働くとともに、土地の事情や習俗に合わせた「書き換え」がなされつつ受け継がれていく、あるいは消えていくというのが、文献と地域を広い範囲で調査され、深く研究された先生の実感であり、結論であった。繰り返すことになるがそれは、文化における「固有」とは何か、を鋭く問う提起でもあった。沖縄とて例外ではないのである。先生のご功績は、得られたデータと研究・考察の範囲にとどまらない。その方法論やスタンスにおいてもまた、得るところ大であると私は考えている。

ここでの記述は先生の沖縄研究における成果に比重を置いたが、ご研究の総体を概観したいという方は、著作集の他の巻、すなわち第6巻『東アジアにおける宗教文化の伝来と受容』、第7巻『道教と仏教』、第8巻『道教とアジアの宗教文化』、第9巻『奄美のカマド神信仰』にも眼を通していただきたい。全9巻の構成とタイトルを見るだけでも、先生のご研究の範疇と範囲と方法、すなわち業績と功績の全般をうかがうことができるはずだ。

先生の論文や著作の末尾あるいは序文に、例外なく添えられる文章があった。その一例。

「諸篇は、手を加えたとはいうものの、あくまで中間報告にすぎない。解決をのちに残した点も多く、考えも十分に熟していない。資料の見方も不足であり、独断、曲解も多いであろう。このような多くの欠点を承知しながら、あえてこのような形で発表するのは、ひとつには、博雅の示教をえて、将来の私の研究続行の指針に資そうと思ったために他ならない。お気付きの点について、細大となく御指摘いただければ、まことに幸いです。」

「博雅」の先生にしてなお、この謙虚さ……。若い研究者たちには、研究の姿勢と態度においてもまた、先生から得るところが大きいだろうと考えるのは、私の「老婆心」がなせる業か。

先生は、調査研究と並行して東大東洋文化研究所長や日本民族学会（現文化人類学会）会長、日本宗教学会理事・評議員、日本道教学会発起人・理事・評議員、など学界の要職にも就かれたが、沖縄研究関係では南島史学会の会長・理事・評議員としてその運営にも携われた。もうひとつ特筆されるべきは、沖縄国際大学に浄財とご蔵書7800冊を寄贈されたことだ。同大学は、これを契機にして1996年に「窪徳忠琉中関係研究奨励賞基金」を創設、先生を審査委員長として多くの若き学徒が表彰され、先生亡き後も継続していると聞く。とはいえこの分野ではこれ以上、先生の業績をくわしく紹介する字数もないし、任とも思えない。

一言付記すれば、私にとって最後の職場となった那覇市立壺屋焼物博物館の開館にあたって、先生が参考図書購入費用の一部にと祝い金を贈ってください、ありがたくお受けしたことがある。それも今だから、ここでなら活字にできるし、公開したいと思う次第である。

最後にご尊顔を拝したのは、10月8日の告別式会場であった。このとき先生のご身体は献花できれいに飾られたのだが、「俺の柄じゃないよ」と、いかにも恥ずかしそうにしておられるように見えて、涙をこらえることができなかった。心残りがなかったはずはないが、少なくとも沖縄研究については、「やったよ、渡名喜君」と話しかけてくださっているようにお見受けした。

あらためて振り返ってみると、先生のご長命は「道教の神々」からのプレゼントのようにも受け取れるのだが、先生が選んだ菩提寺は奥様の縁故もあって浄土宗のそれであり、ご住職の

「引導」によって渡ったのは、阿弥陀如来のまします「極楽浄土」であった。今頃は浄土で、阿弥陀如来から「聞き取り調査」でもなさっておられるのだろうか。道教と仏教の比較研究においても精力的であられたようだから、先生が「彼の地」において調査を継続しておられるとしても不思議ではない。それどころか、今となってはあたりまえのようにすら思えてくるのである。（2013.2.10）

## 窪徳忠先生、蔵書7800冊を本学に寄贈

—譲り受けるに至った経緯—

仲地 哲夫（沖縄国際大学名誉教授）



窪徳忠賞の審査を終えて（2000年）

1992年頃、平敷学長から「窪先生の蔵書を本学が譲り受けることになった。お宅に行って蔵書を調査してくれないか」と頼まれた。20年前の話だから、ノートも見つからずに困っていたが、幸いにも図書課長補佐の山城篤男氏から、1994年4月5日の「沖縄国際大学図書館報」第24号に仲地の署名入りで、「窪先生の蔵書を譲り受けるに至った経緯」が詳細に記録されているファックスが届いた。

「大蔵経など稀観本が多いから、図書館に窪徳忠文庫を設けて、日本民俗学・宗教学（道教、その他）・東洋史などの研究者や学生諸君の利用

に供することにしたい」と、平敷学長は喜んでいました。92年の11月3日から7日にかけて銘苅盛徳氏（当時の図書課長）と仲地が窪先生のお宅を訪問し、3日間で蔵書を隈無く調査させていただいた。93年9月22日から25日にかけて、銘苅氏と仲地の二人は、再び上京して、補足調査を実施し、窪先生との間で蔵書の梱包と移送の日程を調整した。

93年10月4日、南島研と図書館との間で、図書館に「窪徳忠文庫」を設置することを確認した。

同年10月17日から23日にかけて、銘苅図書課長・新川宣安課長補佐・横田栄子整理係長・金城智子係員と南島研の仲地が上京し、窪先生の蔵書目録を作成すると同時に、運送業者に頼んで梱包と搬送作業を実施した。

窪先生のお宅は、以前は1階の応接間とキッチン以外は、書棚が並び、どの棚にも図書が整然と並べられてた。窪先生には、お嬢さんが二人いて、2階はお二人の部屋だったのだが、結婚したり、留学したりして、両方とも先生の書棚になっていた。当分は窪先生の手許に残しておく図書のリストを別に作成し、約3500冊の図書を、梱包し搬送することになったのである。

同年11月2日に蔵書（第1次分）が本学に到着し、5日から図書館で目録作成作業に着手した。2月2日に「窪徳忠先生蔵書目録」が完成し、平敷学長に目録を渡して、「これだけ貴重な図書を評価し算定するのは難しいでしょうか」と提案し、目録に基づいて算定してもらった。その結果2000万円という金額になったのである。

94年1月11日に「窪徳忠先生蔵書贈呈式」が挙行された。この日に学長が小切手を渡したのであろう。その後、2月17日から19日にかけて銘苅課長と新川課長補佐が上京して、窪先生の

蔵書（第2次分）を業者に頼んで、梱包と搬送作業を実施した。2月22日、第2次分の一部が到着し、同26日に第2次分の残りが到着した。

図書のほかに、先生がアジア諸国を調査した際に手に入れた道教関係の神像や珍しい道具も寄贈するというので、私は上京してそれらをつづつ見せていただいた。それを展示すると、道教に対する興味が湧いてくるだろうと感慨にふけっていると、突然窪先生が台所にいた奥様を呼んで、「仲地君、この金を沖国大に寄付したい」とおっしゃるので、「私が受け取るわけにはいかない金額ですから、今度、大学においでなさいに学長と差しで御相談なさってください」と鄭重にお断りした。お二人とも、笑って了解されたので、私は改めて御礼を述べて辞去した。

## 窪徳忠先生を悼む

来間 泰男（沖縄国際大学名誉教授）



窪先生から基金を受け取る当時の来間南島研所長  
(1996年)

窪徳忠先生が10月2日（土）に亡くなられた。満97歳であった。

先生は「道教」の研究者として知られ、その日本への伝播ルートの一つとして沖縄に注目された。日本復帰の少し前に始まった「九学会連

合」の沖縄調査団のメンバーとして初めて来沖され、その後40年にわたって調査を続けられ、またその報告書をせつせと書き綴られた。

私は専門分野が異なるが、先生のお力添えを得て、沖縄国際大学南島文化研究所（南島研）に「窪徳忠琉中関係研究奨励賞」を設けたときの所長であったので、そのことに関して若干の思い出を記して、追悼の意を表したいと思う。

窪先生は東京大学の東洋文化研究所に永くお勤めになり、多くの図書と資料を蓄積してこられたが、それを南島研にすべて寄贈された。大学では一応の価値評価をしたうえで、2千万円をお支払いした。しかしそれは受け取れないとのことで、これを基金にして奨励賞を創設しようという提案されたのである。

当時の学長は平敷令治先生であった。その平敷先生とも相談しながら、設立委員会をつくり、内容を定めていった。まず賞の名称に窪先生のお名前を冠することに先生は反対されたが、賞の対象は、琉球と中国・台湾との関係をテーマとする若手の研究者とすることとした。

問題は金利低下の始まっていた時代に、2千万円の金利で運用することは難しいということにあった。そのことを私は先生の前で漏らしてしまった。スタートして1年、最初の授賞対象者の選考があり、別れ際に先生は黙って封筒を差し出された。中身を聞くこともなく受け取った私は、翌朝それを開いて驚いた。実に、1千万円の小切手が入っていたのである。すぐに平敷先生と相談し、引込めるはずないから丁重にお礼を言っていただくことにした。これで基金は3千万円になった。もちろん金利はみるみる下がっていったので、賞金や運用費用は大学の一般財政から支出している（「基金」の取り崩しはできない）。

なお、この奨励賞は、赤嶺守、小熊誠、豊見山和行、田名真之、孫薇、深澤秋人、真栄平房

昭、上江洲安享、辻雄二、外間みどり、大浜郁子、上里隆史、陳碩炫の諸氏に授与されている（欠年あり）。

窪先生は審査と授賞式に毎年出席され、マイク無しでも通るお声でお祝いとともに、率直な批評を添えるのが常であったが、2年前からそれも果たせず、手元に残してあった最後の図書と資料もついに南島研に引き渡されたところであった。

まさに天寿をきれいに全うされ、静かにわれわれから去っていかれたのである。ご冥福をお祈り致します。

（2010年10月15日『琉球新報』朝刊13面より転載）

## 窪徳忠先生を偲ぶ

小熊 誠（神奈川大学）



窪先生88歳のトーキョー祝いの会食（2000年9月）

窪徳忠先生を初めてお見かけしたのは、1985年筑波大学で開かれた日本人類学会・日本民族学会連合大会のレセプションの席上であった。私は、筑波大学の助手で大会スタッフの一人としてそこにいた。広い会場に人がごった返っていた。挨拶が始まった。乾杯の挨拶に立たれた窪先生は、例のごとく「マイクはいりません」といって大きな肉声で挨拶された。その場は、一瞬どよめき、そして静まり返った。その凛とした窪先生のお姿に、近寄りがたい畏敬を感じ

た。窪先生はその時すでに72歳であった。

翌年、私は沖縄国際大学に赴任することになり、すぐに南島研の所員に加えていただいた。窪先生に親しく接していただくようになったのは、南島研に来てからのことである。窪先生は、毎年のように沖縄に来られて火の神を中心に調査を継続されていた。先生の常宿は、久茂地川沿いにあるホテルサンパレスだった。先生のお気に入りには601号室だった。ベランダからブーゲンビリアのピンクの葉が見える落ち着いた宿だった。そこに、よくお邪魔した。後述するが、窪先生の研究奨励賞審査委員会は、いつもそこで行なわれた。

来沖されると、律儀にもそのホテルから必ず南島研にご挨拶にいらっしゃった。平敷令治先生や仲地哲夫先生がお迎えすると、窪先生は毅然とした姿勢とお声で、開口一番「お世話になっています」と片手を頭の横にあげて挨拶されるのが倣いであった。そうすると、平敷先生や仲地さんが笑顔満面で「よくいらして下さいました」と応えると、「えへへへ」と窪先生も顔を崩されるのであった。そのやり取りを私はいつも傍で拝見していた。窪先生の沖縄研究に対する真摯な姿勢を、南島研の皆さんは尊敬し、そして窪先生のお人柄に親しみを感じていたに違いない。その師弟関係とも、友人関係とも言えない、何とも言えない信頼関係を傍で心地よく感じ取っていた。

南島研では、研究所の合同調査という事で毎年地域を定めてフィールドワークに出かけている。合同で行くことが基本であるが、窪先生は一人で出かけられることもあった。1993年の11月、この南島研の調査で私は一人で多良間島に出かけた。すると、本当に偶然に窪先生も多良間島にいらして、同じ宿になった。確か、ちとせ旅館だったと記憶している。そこで、ご一緒に聞き書きもさせていただいた。そ

の時のノートを見ると、カマド神について聞いただけでなく、風水についても若干聞いている。そのノートには、居眠りの筆の乱れが見られる。お恥ずかしい次第である。窪先生は、調査したことはその日のうちにノートにまとめるのが倣いだというお話しは何度か伺っていた。ちとせ旅館でも果たしてそれを実行しておられ、それを目の当たりに拝見した。窪先生のその時の調査結果は、きちんと『多良間島調査報告書(2)』に掲載されている。なるほどと思った。私はというと、いつも中途半端な調査しかしてこなかったのも、その時の調査内容はまだノートの中に埋もれたままである。これも、お恥ずかしい次第である。

窪先生から蔵書寄贈のお話があった。当初は、南島研に寄贈を希望されていたように記憶している。窓口は、平敷先生であったと思われる。平敷先生が1992年に学長になられてすぐにこの件が大学全体で検討され、図書館でお引き受けすることに決まった。びっくりするとともに、窪先生の蔵書がいつでも見られるということが嬉しかった。当初南島研でお預かりしていた蔵書は、1998年に新図書館が竣工すると、その地下2階に窪徳忠文庫が整備された。よくそこに出かけては窪先生の蔵書を手にした。すると、窪先生の学問の軌跡に触れることができるような身の引き締まる感覚を覚えた。それから、窪先生が集められた民間道教関係の貴重なコレクションも寄贈いただいた。新図書館の4階に展示スペースを確保していただいて、それを展示ケースに入れて、ちょっとした資料展示コーナーを作った。当時の民俗学専攻の学生さんに手伝ってもらった。しかし、人が自由に出入りして見ることができない場所なので、それが残念である。

窪先生の蔵書とコレクションには、大学からそれ相当の謝礼をお支払いした。そのころ、窪



先生は南島研にいらっしゃる度に、「謝礼は困る、お断りする」とおっしゃるのだが、平敷先生は「当然のことです」とそれだけは頑として受けつけなかった。そのうちに、窪先生が名案を思いつかれ、南島研に寄付したいと提案された。波平勇夫先生が所長で、来間泰男先生が副所長の時であろうか。窪先生の寄付の申し出に、南島研も名案を出した。それを基金として、研究奨励賞を創設しようという提案であった。これで双方が歩み寄ったわけだが、この次第を傍で見ていて、学問を通した純粋な感謝と尊敬の気持ちの崇高なやりとりだと感動したものだ。窪先生は、この賞に対して条件を付けられた。沖縄研究に関わる若者の研究を奨励すること、そして沖縄と中国の研究に従事していることという2点であった。それを斟酌して、名称は窪徳忠琉中関係研究奨励賞と決まった。この規程作りは、来間先生が鮮やかにこなされた。1997年、来間先生が所長の時に、第1回の奨励賞受賞者が決まった。琉大の赤嶺守氏だった。第2回は、不肖ながら私とその名誉ある賞を頂いた。授賞式に妻とともに窪先生から励ましのお言葉をいただいて感動したことが、今でも忘れることができない。

2000年の9月であっただろうか、まだ暑かったように記憶している。窪先生の88歳のトーチのお祝いを南島研でやりましょうという事になった。窪先生が沖縄にいらっしゃるまではこのことは伏せておいて、いらしたときに驚かせようという茶目つけのあるお祝いだっような気がする。都ホテルで、トーチのお祝いの会食をした。窪先生は、その場でこの事を聞いて目を丸くして驚かれ、「いやー」といって手で頭の後ろを撫でて照れ笑いされていた姿を思い出す。仲地先生が所長であったはずである。平敷先生をはじめ、歴代の所長も参列された。その時の皆さんの笑顔が忘れられない。

最晩年になっても窪先生は窪徳忠奨励賞の審査のために、毎年ホテルサンパレスにいらしていた。今年が最後になるかもしれないいつも冗談をおっしゃっていた。しかし、2008年が来沖の本当の最後であっただろうか。2009年4月、私は神奈川大学に移った。すぐに大和市のご自宅に窪先生を見舞った。まだお元気であった。2010年の春だったろうか、南島研の上原所長、崎浜さんと老人ホームに窪先生を見舞った。眠っておられたが、我々が入室すると目をあけられて、やはり大きなお声で「おうー、よく来た」と声をかけて下さり、若かりし頃中国に行かれた話や、懐かしい沖縄の話をして下さった。脳の回転は、いつもとお変わりなかった。

窪先生は、本当に南島研がお好きであった。そして、南島研の誰もが窪先生のことを尊敬し、親しみをもって接してきた。南島研を支えていただいた巨星が、また一つ消えた。しかし、窪先生の南島研に残された軌跡は研究として消えることはないし、窪徳忠琉中関係研究奨励賞として今でも息づいている。それを礎に、これからの南島研の発展を祈ると同時に、窪徳忠先生のご冥福を心からお祈りしたい。合掌。

## 窪徳忠先生追悼文

赤嶺 守 (琉球大学法文学部教授)

私は台湾で初めて窪徳忠先生にお会いした。当時、私は台湾大学大学院の院生で、確か台湾師範大学の王啓宗教授の紹介だったと記憶している。王啓宗教授は台湾史の専門家で各地の道教の廟を踏査し、台湾では頗る知名度の高い学者であった。王先生自身、日本語が達者で、私に窪先生をご紹介して下さった時には窪先生とは旧知のように思えた。台湾での窪先生の調



第1回窪徳忠賞贈呈式の日（1997年）

査のお世話をされていたようで、私自身もその後、窪先生が台北近郊で調査をされる際には何度か通訳としてお手伝いをさせていただいた。窪先生は中国語を全くといっていいほど話せなかったが、しかし通訳を介しての調査は徹底したもので、次から次へと質問をなさり、まめに記録されていた。話の中で窪先生の関心のある人物の話になると、すぐに紹介してくれと依頼し、また調査の対象になりうる場所は徹底して踏査されるというスタンスで、私自身もその度に通訳を依頼され、時間の許す限りお手伝いをさせていただいた。

ある日、調査がおわりホテルにもどった後、沖縄の文化について語られたことがあり、そのお話に強いインパクトを受けたことを記憶している。窪先生は沖縄の文化は、日本や中国はいうまでもなく、東南アジアやポリネシアの文化的影響を受けている重層文化で、その特性が見出しにくく、沖縄の文化の独自性というのは、その重層化した文化を一枚一枚剥がしていくと見えてくるのかもしれないと話しておられた。私たちは重層化した文化が沖縄の文化の特性だという風に理解しているが、どうも窪先生は、そうした一般的な文化理解には何らかの抵抗をもっておられたようである。私が琉球大学に赴任した後も、お会いした際には何度も沖縄の文化の独自性を、どういった点に見出し得るのか

お尋ねになられた。窪先生は中国文化との比較で沖縄における道教や風水思想に関心をもたれ、徹底したフィールド調査をされておられたが、その調査の中でも、おそらく常に沖縄文化の独自性について考えておられたのだと思う。私自身、民俗学者ではないので、窪先生のそうしたご質問には、今後もお答えすることはできないと思うが、歴史学の領域においては、今後何とかお答えできるのではないかと思う。ご縁があり、第一回目の窪徳忠琉中関係研究奨励賞を受賞させていただき、私自身の大きな励みとなっている。私以外にも、多くの方々が窪先生に出会い学問的な啓発をうけたであろう。窪先生のご冥福を心からお祈りいたします。



南島研を訪れた仲松弥秀先生（右）とともに  
(2000年)

## 窪徳忠先生略歴

【『東方學』第百十輯（平成17年7月）「座談會 學問の思い出－窪徳忠博士を圍んで－」より一部転載】

1913年9月25日

東京麹町区紀尾井町9にて誕生

1934年3月 浦和高等学校文科丙類卒業

同 年4月 東京帝国大学文学部東洋史学科入学

1937年3月 同右卒業

同 年5月 東京府立豊島師範学校授業嘱託

1938年3月 函館重砲兵連隊入隊

1942年4月 召集解除

同 年7月 東方文化学院研究員

1948年4月 東洋文化研究所研究員

1949年5月 東京大学助教授（東洋文化研究所勤務）

1962年3月

文学博士学位授与

1964年11月

東京大学教授（東洋文化研究所勤務）

1973年4月

東京大学東洋文化研究所所長

1974年3月

東京大学教授退官（定年制による）

同 年同月

立教大学文学部（史学科）教授

同 年5月

東京大学名誉教授

同 年9月

国立民族学博物館評議員

1976年10月

紫綬褒章受章

1979年3月

立教大学教授退任

同 年4月

二松学舎大学文学部教授

1982年3月

右退任

同 年4月

鶴見大学（短期大学部）教授

1984年3月

右退任

同 年11月

勲三等旭日中綬章授与

## 著述目録（沖縄・奄美関係を抜粋）

### 著書

『沖縄の社会と習俗』（編）東京大学出版会 1970年10月

『沖縄の習俗と信仰－中国との比較研究』東京大学出版会 1971年3月

『増訂沖縄の習俗と信仰－中国との比較研究』東京大学出版会 1974年3月

『沖縄の外来宗教－その受容と変容』（編）弘文堂 1978年1月

『中国文化と南島』第一書房 1981年11月

『沖縄の民間信仰－中国文化からみた』ひるぎ社（新書）1989年3月

『目で見る沖縄の民俗とそのルーツ』沖縄出版 1990年9月

『沖縄の風水』（編）平河出版社 1990年9月

『中国文化と南島』（訂正二刷）第一書房 1995年11月

『窪徳忠著作集』1, 2, 3 第一書房 1996年12月

『窪徳忠著作集』4, 5, 6, 7, 8, 9 第一書房 1997年5月～2000年9月

### 論文

「沖縄の道教信仰」『社会と伝承』10-2 1967年5月

「沖縄の神仙説」『社会と伝承』10-4 1967年11月

「沖縄地方の土帝君信仰」『東洋文化』48・49 1970年3月

「沖縄における中国的信仰」『人類科学』23 九学会連合 1971年3月

「沖縄地方の中国的習俗」『日本歴史』277 1971年6月

「沖縄と中国文化－比較研究の必要性」『わが沖縄－沖縄学の課題』木耳社 1972年9月

「惜字紙の習俗と沖縄地方」『南島史学』1 1972年10月

「道教と日本－后土神とヒジャイ」『鈴木由次郎博士古稀記念 東洋学論叢』明德出版 1972年10月

「沖縄の民俗宗教と中国」『沖縄の民族学的研究』日本民族学会 1973年3月

「中国の信仰習俗と日本－石敢當を例として」『史学論集対外関係と政治文化－森克己博士古稀記念』吉川弘文館 1974年2月

「沖縄の神仙説」『歴史読本』19-9 新人物往来社 1974年7月

「沖縄における外来宗教の受容と変容」『人類科学』27 1975年3月

「中国の習俗と日本－石敢當を中心として」『九州人類学会報』3 1975年10月

「沖縄の宗教概観」『季刊現代宗教』1-3 エヌエス出版社 1975年11月

「中国の習俗と『四本堂家礼』」『南島史学』7 1975年11月

「『四本堂家礼』にみる天妃信仰」『社会と伝承』14-4 1975年12月

「『四本堂家礼』に見える沖縄の中国的習俗」『東方学』51 1976年1月

「保良の中国的習俗」『沖縄－自然・文化・社会』九学会連合 1976年2月

「道教的信仰－本島中・南部の土帝君信仰」『沖縄－自然・文化・社会』九学会連合 1976年2月

「宗教研究の展望」『沖縄－自然・文化・社会』九学会連合 1976年2月

「后土・ヒジャイ・トチジンウイ」『南島－その歴史と文化』南島史学会編 国書刊行会 1976年11月

「沖縄における中国的習俗」『民族学研究』41-3 1976年12月

- 「中国の土地公と沖縄の土帝君」『史苑』37-2 1977年3月  
「中国の後土とヒジャイ」『江上波夫教授古稀記念論集－民族・文化編』同記念事業会 1977年4月  
「中国の後土神信仰と沖縄」『沖縄の外来宗教－その受容と変容』弘文堂 1978年1月  
「台湾の土地公信仰と沖縄」『星斌夫博士退官記念 中国史論集』同記念事業会 1978年1月  
「中国文化と沖縄」『南島－その歴史と文化』2 南島史学会編 国書刊行会 1979年9月  
「奄美群島における中国的習俗」『南島史学』14 南島史学会 1979年9月  
「奄美地方の中国的信仰と習俗」『奄美における自然・社会・文化に関する総合的研究』九学会奄美調査委員会 1980年3月  
「奄美群島における中国的習俗統考」『南島史学』15 南島史学会 1980年3月  
「沖縄と奄美」『南島－その歴史と文化』3 第一書房 1980年10月  
「奄美地方の中国的信仰」『奄美－自然・文化・社会』九学会奄美調査委員会 弘文堂 1982年2月  
「奄美地方の竈神信仰－その位置づけを中心として」『南島－その歴史と文化』4 第一書房 1982年11月  
「石垣島在住華人の中国的信仰－長崎市の場合と比較して」『わが国華人社会の宗教文化に関する調査研究』（文部省報告書）1983年3月  
「石垣島在住華人の土地神信仰－長崎市の場合と比較して」『宗教文化の諸相 竹中信常博士頌寿記念論文集』1984年3月  
「石敢當からみた中国・奄美・沖縄」『南島史学』23 1984年4月  
「沖縄と奄美－石敢當を通してみた」『東洋大学東洋史研究報告』Ⅲ 1984年8月  
「徳之島の竈神信仰」『徳之島調査報告書』2 沖縄国際大学南島文化研究所 1985年3月  
「続 徳之島の竈神信仰」『徳之島調査報告書』3 沖縄国際大学南島文化研究所 1985年11月  
「沖縄の墓中符」『球陽論叢』1986年12月  
「加計呂麻島南部の竈神信仰－中国・沖縄県と比較して」『鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書』1 沖縄国際大学南島文化研究所 1987年3月  
「中国の辟邪法と沖縄」『明治大学社会・人類学会年報』1 1987年9月  
「沖縄文化に及ぼした中国文化の影響」『史海』5 1987年11月  
「琉球文化に及ぼした中国文化の影響」『第一屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』中琉文経協会 1987年10月  
「徳之島のかまどガミ信仰概観」『徳之島郷土研究会報』14 1988年11月  
「瀬戸内町の竈神信仰－加計呂麻島を中心として1」『鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書』3、4 沖縄国際大学南島文化研究所 1989年3月  
「瀬戸内町の竈神信仰－沖縄県下と比べて」『南島文化』11 沖縄国際大学南島文化研究所 1989年3月  
「沖縄のかまど神－中国・奄美と比較して」『第11回南島文化市民講座』1990年2月  
「九学会連合調査の思い出」『人類科学』42 1990年3月（『地域文化の均質化』平凡社に転載 1994年2月）  
「宮古来間島の竈神信仰」『宮古下地町調査報告書』1 沖縄国際大学南島文化研究所 1990年3月  
「沖縄県下の墓中符について」『沖縄の風水』平川出版社 1990年9月  
「奄美喜界島の竈神信仰」『神・村・人 仲松彌秀先生傘寿記念論文集』第一書房 1991年3月  
「唐尺と魯班尺」『琉中歴史関係論文集 第四回琉中歴史関係国際学術会議』1993年3月  
「文化の伝播と受容－中国と八重山」『石垣市史のひろば』18 石垣市 1993年3月  
「奄美地方の唐尺について」『徳之島郷土研究会報』19 1993年12月  
「唐尺」『琉球列島における宗教関係資料に関する総合調査・総合目録篇』1994年3月  
「多良間島のかまど神信仰（1）」『多良間島調査報告書』2 沖縄国際大学南島文化研究所 1994年7月  
「多良間島のかまど神信仰（続）」『多良間島調査報告書』3 沖縄国際大学南島文化研究所 1995年3月  
「中国文化と南西諸島」『宗教研究』307 1996年3月  
「宮古郡上野村のかまど神信仰」『宮古、平良市調査報告書』2 沖縄国際大学南島文化研究所 1997年3月  
「宮古島のかまど神信仰」『宮古、平良市調査報告書』3 沖縄国際大学南島文化研究所 1998年3月  
「竹富町のかまど神信仰－西表島を中心として」『八重山、竹富町調査報告書』2 沖縄国際大学南島文化研究所 2000年3月  
「西表島のかまど神信仰（1）」『八重山、竹富町調査報告書』3 沖縄国際大学南島文化研究所 2001年3月  
「西表島のかまど神信仰（続）」『八重山、竹富町調査報告書』4 沖縄国際大学南島文化研究所 2002年3月  
「琉球における中国的宗教文化」『宗教研究』343 2005年3月

## 編集後記

所報58号は窪徳忠先生追悼号としました。所員、特別研究員、学外の皆様に窪先生への思いを綴っていただきました。心から感謝申し上げます。また、先生の略歴・著述目録は『東方學』第百十輯（2005年）から沖縄・奄美関係を一部転載いたしました。転載をご許可下さいました財団法人東方学会には記してお礼申し上げます。

執筆して頂いた追悼文を読んでみますと窪先生

への思いが伝わるとともに、先生のお人柄や研究姿勢が偲ばれます。

学生の頃、アルバイト先のホテルに窪先生が宿泊されていたので「沖縄国際大学の平敷先生（民俗）のゼミです」とご挨拶したところ、励ましのお言葉と帰宅後にお葉書を頂き、感激したことを思い出しながら編集しました。（儀間）